

僕である意味、そこにある自由

作詞 J'Soul (浅羽一)

時計の針から涙がこぼれ 僕は慌ててゼンマイを巻いた
ひび割れた文字盤に刻まれた 未来に僕は虚しさを抱く^{いだ}
^{はじめ}最初から決められたものであるなら 僕でなくても良かったじゃないか
それなのにどうして僕は 秒針の動きに足を重ねる
僕が本当に虚しかったのは 流されるままの無力な自分で

踏切の音が突然鳴って 僕は急いで線路をまたぐ
駅も見えない軌道の果てから 形も知らない列車が走る
地上に敷かれた終わりに繋がるなら 僕でなくても良かったじゃないか
それなのにどうして僕は 入り口を追いかけ掴んで飛び乗る
僕が本当に悔しかったのは 自分で走れぬ無様な自分で

自由になりたいと拳を叩きつけた壁には 遙か昔から手紙が貼られてて
そこには子供が書いたような下手くそな文字で
『いつか誰かがこの壁を叩く』と ふざけた予言が記されていた
僕は本当の自由の意味すらまだ知らぬのに
見せかけの自由を勝手に決めつけて

種から芽生えた青い双葉に 僕は何度も^{くすり}栄養剤をかけた
太陽や水なんか頼らずに 僕だけの手で花を咲かせたくて
胸に僕が枯らした緑の聲が降る 『僕でなくても良かったじゃないか』
それなのにどうして僕は 言い訳と知りながら他人^{ひと}のせいにした
僕が本当に消したかったのは 隣の泣き声に気付けぬ自分で

自由になりたいと誰かを殴るのは簡単で 理由も分からず右手を振り上げた
下から頭を庇って見つめていた瞳は
『僕にはなりたい夢があるんだ』と いつか叫んだ幼い僕だった
僕は本当の自由の意味すらまだ知らぬのに
見せかけの自由を勝手に決めつけて

純粋な童心に焼き付いた印は 大人になった彼らの烙印で
何より欲しがる『自由』の意味も 曖昧な言葉でしか語る事も出来ず
僕が望んで口にした『自由』など 作られた籠のなか生まれたもののなのに

● 繰り返し

▲ 繰り返し